

《論 文》

日本語学習における随筆テキストを用いた読解指導

—文学的文章の導入として—

立 川 和 美

Instructions for Reading Comprehension Using *Zuihitsu* Texts in
Japanese Language Learning
—The Introduction of Literary Texts—
KAZUMI TACHIKAWA

キーワード

日本語教育 (Japanese Language Education), 読解指導 (Reading-Comprehension Instruction), 随筆 (Zuihitsu Text), 文学的文章 (Literary Text)

日本語教育の分野では、論説的文章の指導に関する先行研究は多いが、文学的文章の読解についての取り組みはあまり多くはない^(注1)。本稿では、日本語教育における文学的文章読解の導入として、随筆というジャンルを用いる試みを提案し、その具体的指導に結びつくと考えられる文体的特徴を中心に議論を進めていきたい。

1. 読解指導に関する先行研究

日本語教育の分野では、読解指導に関する研究が理論と実践の双方から進められている。本章では、ごく最近の例をいくつか取り上げたい。

まず、文学的文章を扱った研究として、江田・飯島・野田・吉田 (2005) がある。これは、短編小説を使った多読の実践についての論考であるが、指導の対象である中上級者が、楽しんで読む姿勢を育成するために、特にトップダウンの読みの大切さが指摘されている。

次に、読解の方策に関する理論的研究として、小森・三國・近藤 (2004) では、文章理解と語彙知識との関係が議論されている。そして、文章問題 8 割の正答には、既知語率が 96% 必要とされると結論づけられている。また館岡 (2001) では、読解過程を問題解決活動と捉え、文章理解までの道筋が発話プロトコル法に

よって検証されている。

2. 中・上級レベルにおける読解指導

一般に、大学学部レベルの留学生に対する第二言語教育では、授業や研究に直結するジャンルとして「論説的文章」が多くとりあげられており、その精読や多読といった実用的な読解指導が行われている。しかし、「文学的文章」に対する学生の関心も決して低くは無いのであり、日本文学を純粋に味わいたいという目的に加えて、文学を通して日本文化や精神を理解したいなど、その目的は多岐に渡っている。更に注目すべきは、こうした「小説を読みたい」という希望は、日本文学を専攻していない学生、つまり本学に在籍する社会科学専攻の学生にも多いという事実である。よって、語学としての日本語教育ではあまり取り上げられることのない文学的文章というジャンルは、今後、その教育方法の開発が求められる領域であるといえる^(注2)。

こうした日本語の文学作品を味わう場合に、まず問題となる事柄は、ジャンルに特有のテキスト全体の分量の多さ、書き手の癖などによる一文の長さ、語彙の難しさといったことであろう。そこで、読解指導の導入の段階において

は、これらの問題のハードルを低くすることで、文学的文章というジャンルに慣れ、読解力をつけていく足がかりになるのではないかと考え、随筆というジャンルに注目した。

随筆は、基本的に短編であるため、一編の長さが適切に保たれ、更にバラエティに富んだ内容（文学的・論理的の両方の要素）を持つジャンルであるという利点がある。更に内容の展開が単純であるとか、低年齢者向けであるとかいうことはなく、内容的な深みと一定の知的レベルが保たれるといった、留学生の読み物として適切であるという要素もある。以上の理由から、随筆ジャンルを教材と扱うことに対する有効性は、高いと思われる。

3. 随筆のジャンル特性

近現代日本語の文章論におけるジャンル規定としては、五十嵐（1909）による「記実文・叙事文・説明文・議論文」が始まりと見るのが一般的だが、これは西洋のテキストのジャンル分けを日本語へと応用したものである。その後、1980年頃からは、文章の機能や目的、例えば読み手は特定か不特定か、テキストの目的は伝達か説得か、といった指標によるジャンル分けが行われるようになった。しかし、客観的な言語的特性に基づく分類は見られず、厳密なジャンル規定は難しいのが実際である。

さて、随筆テキストのジャンルの特性としては、まず、その内容が「文学的要素」と「論說的要素」との双方に渡り、バラエティに富むという性格が挙げられ、そこから、日記的、評論的、小説的など様々な内容が含まれるという特徴がある。ただし、ノンフィクションであるという性格も持つことから、小説やコラムとは異なるジャンルだといえる。つまり、日本語テキストのジャンルとしては極めて曖昧な位置づけをされているのである。

また日本では比較的新しい「エッセイ」というジャンルとは、類似性も見られるものの、西洋における「エッセイ」が明確な主張をもつ一方、随

筆では明確な主張は避けられる傾向がある点において、やはり両者は異なったものとするのが妥当であろう^(注3)。

更に随筆は、肩の凝らない読み物として古くから親しまれてきた、日本人にとっては馴染みの深いジャンルでもある。古くは『枕草子』までさかのぼることができるという歴史を持つことが、それをよく表している。

以上から、随筆とは日本語テキストに特有のジャンルだといえるが、その中で、現代随筆とは、書き手が強い主張を示すことなく、読み手の興味を考慮した姿勢で叙述するという特徴を持つテキストである。またその内容の幅広さから、文章構造の様相が豊かであり、線条的（文学的）な構造から立体的（論理的）な構造まで様々なタイプが見られる。これは、今回目標とする文学的文章だけでなく、様々なジャンルを読み解く必要がある中上級の教材としても、有効な性質だといえる。このほか、間テキスト性という点では、随筆は、書き手の社会的立場や性などがその内容と深く関わることから、論理的文章の読解とは異なる手法が要求されることにも注意したい。

以下、文学テキストを読み解く上で必要な文体的特性の学習に向けて、テキスト分析の手法を利用して随筆の分析を行っていく。随筆テキストの読解指導では、「予測の読み」を利用した効率的な読解の習得が重要である。とりわけ随筆テキストが持つ文体的、言語的特性を予め理解することで、読解の方策が立てやすくなることが予想される。

4. 随筆テキストの文体的特性

4. 1. 指導教材：随筆 2編

今回は、随筆ジャンルの中で、論說的な性格と文学的な性格との2編の文章を分析し、教材とする。以下、その2編を示すが、いずれも『文藝春秋』の「巻頭随筆」に掲載された文章であり、広く「随筆」というジャンルに属するものと認められるテキストである。

テキストその1「気配りとずるさ」

山内昌之（東京大学教授）

この文章は、随筆の中でも論説的な傾向が強い。内容は、前半から中盤にかけては、故竹下登元首相の政治手腕を象徴的に示すことを意図した、具体的なエピソードを織り交ぜた内容であり、最後の段落では、筆者自身の考えが示されているという展開となっている。

他人への気配りは日本人の美德といわれてきた。公私ともども、かゆい所によく気がつく人は、どの職場でも受けがよく、概して日本で成功するタイプだといってもよい。政治の世界も例外ではない。しかし、気配りは打算やずるさと紙一重である場合もあるのではないか。『政治とは何か』と題した竹下登回顧録を読むと、この希代の気配り人間の精神構造に潜んでいたずるさが見えてくる。面白いのは、当人も決して自分のずるさを隠しておらず、ずるさが卑怯になっていないことだろう。

故竹下氏は、最初に島根県議会に入ったときから、いずれ代議士になろうと思っていたから、功をあえて人に譲ろうとしたとあけすけに語っている。委員長になったり、代表質問をするといった目立つことはしないのだ。いずれかの日に人びとに公認してもらわないといけなからというのである。「その点はずるいといえばずるかったんだな」とは、ずいぶんと赤裸々な告白であろう。（中略）

逆にいえば、世の中にはずるだけで世すぎをする人間の方が多い。竹下氏の場合、気配りが目立つのであり、ずるさはちょっと見には分からないのである。もっとも竹下流の気配りは、かつての自民党政治には珍しくなかったらしい。いちばん大事なのは、人に恥をかかせない気配りだったようである。大臣答弁で質問に立った野党議員の無知や誤解をあげつらうのは論外で、間違いを自分で悟らせるのが大臣の大臣たる所以だと諭した椎名悦三郎のような人もいた。とにかく、こちらが分かっている話であっても、初耳のような仕草や驚きで聞くふり

をするのが大事だというのは、どの世界にもあてはまる知恵かもしれない。

竹下氏は、頭のよい橋本龍太郎氏の場合には相手の話が馬鹿らしくなるから、「それはこうでしょう」と相手をやりこめると紹介している。それではダメなのだとやや辛口の寸評をするのは、「相手は軽蔑されたと思う」からなのだ。（中略）

竹下氏の気配りは、記者に対しても発揮されたい。記者も時にはトンチンカンなことを言うというのだ。それでも、間違っているよと、さも軽蔑したような感じを受けさせないように当人に悟らせねばならない。もちろん、竹下氏は何の欲や打算もなく、ただ気配りだけをしたはずもあるまい。自分で何度も認めているように、そこには政治家としてのずるさがからんでいることも疑えない。しかし、気配りがずるさを伴っているといっても、ずるさや打算が見え見えで友人や同志を裏切るような姿が見えないのが救いであろう。打算を感じさせずに、ずるさを利害に結びつけるあたりが一流の政治家になれるか否かの境なのだろう。気配りを装いながら露骨に友を裏切るのは、むしろ世の中で奇麗事をいつている別のタテマエ世界の方かもしれない。

もちろん、一概にずるさの効用を否定もできない。竹下氏が外交を常識のやりとりという時、交渉とは気配りとずるさの入り混じった芸術かもしれないという気がしてくる。お前は間違っているといわないで、自分も昔はそう思っていたがやがて間違いだと分かったと語る。「いやあ、恥ずかしかった」といえば、相手もそんな恥ずかしいことを言っているのかな、という気分になってくるのだ。タフ・ネゴシエーターとは、強烈な交渉者というよりも、相手の立場まで下がるか相手の立場を引き上げる能力がある人だとは至言であろう。

「日本的なるものを極めているから国際性がある、それが国際人であるという気がしますけど」というのは、とかく外国人のずるさに出し抜かれ気配りが裏切られる日本人にとって、味わい深い言葉ではなからうか。

テキストその2 「母の死」

高橋源一郎（作家）

この文章は、随筆の中でも文学的な性格の強いテキストである。筆者の母が、東京駅で倒れた時から亡くなるまでの約1週間を、時系列で並べた内容で、事実を線条的に語るスタイルとなっている。

11月26日火曜日。午後2時過ぎ、北海道の杜台ファームで取材していると、携帯電話が鳴った。東京駅で母が倒れ、病院へ運ばれたという連絡だった。

どこの病院か、とわたしは訊ねた。御茶ノ水の駿河台日大病院だ、とYがいった。わたしは取材中の西日本テレビのクルーに千歳空港まで送ってもらった。羽田に着き、少し迷ってタクシーに乗った。案の定、道はひどく混んでいた。

病院に着いたのは6時ごろだった。玄関をくぐると、3メートルほど後ろに弟がいることに気づいた。弟は大阪から新幹線で来て、ちょうど着いたところだった。

母は救命救急センターに入院していた。わたしと弟は病室に案内された。母はたくさんのチューブを繋がれて眠っていた。すぐに、医者が現れた。医者はわたしと弟に病状説明をした。医者によれば、母は東京駅のホームで倒れた。心室細動だった。母が病院に運び込まれた時、すでに心臓は停止していた。いまは人工心肺で動かしているが、助かっても脳にダメージが残るだろう、と医者はいった。

わたしと弟は病院の待合室のソファで一晩過ごした。

今度心臓の発作があったらもうあかんと医者にいわれていた、と弟はいった。そのことをわたしは知らなかった。

水曜日。わたしは、病院近くの山の上ホテルに泊まりそこから通うことにした。病状に変化はないようだった。（中略）

金曜日。病状は安定している、と医者はいった。

土曜日。夕方から少しずつ体温をあげていく、と医者はいった。たぶん、といい、それから必ず感染症が現れるので、そここのところを乗り越えられれば、と医者はいった。

日曜日。三時、ホテルをちょうど出ようとしていると、病院から電話があった。いますぐ来られますか、と看護婦がいった。いまちょうど行くところでした、とわたしは答えた。

病室に行く前に、医者の病状説明があった。（中略）家族を呼んだほうがいいか、とわたしは訊ねた。呼んでください、と医者はいった。わたしは大阪の弟に電話をかけた。すぐ行く、と弟はいった。（中略）

夜9時ごろ、弟と娘のSちゃんが着いた。（中略）血圧はさっきより少し上がったようだった。YとSちゃんはいったんホテルに戻ることにした。

月曜。午前4時半。交代するために弟が病院に現れたのと、看護婦が現れたのは同時だった。すぐ来てください、と看護婦はいった、わたしたちは病室に向かった。とても悪い、と医者はいった。血圧を無理にあげるのは止めました、といった。もうすぐなんですね、とわたしは訊ねた。医者が頷いたので、弟はホテルに待機しているYとSちゃんを呼びにいった、病室にはわたしと医者だけが残った。わたしは計器を見つめていた。血圧の動きを示す波が突然直線になった。数値は十一。終わったのですか、とわたしは訊ねた。そうです、と医者は答えた。でも、みなさんが揃うまでもう少し器械は動かしておきます。5分ほどで3人がやってきた。Yは泣いていた。Sちゃんはなんだかよくわからないのか、クスクス笑っていた。医者は小さな懐中電灯を母の瞳孔に当てた。それから、腕時計を見ていった。午前4時55分、死亡を確認しました、といった。そして、一礼すると病室を出て行った。

わたしと弟はしばらくの間、軀をさすりながらずっと母に話しかけていた。「ごくろうさん」と弟はいった。「やっと休めるで」とわたしはいった。気がつくと、わたしは大阪弁で話しか

けていた。大阪弁を私は何十年もまともにつかうことがなかった。しかし、この1週間、病室ではずっと大阪弁で話していたのだ。

4. 2. 文末表現

まず、モダリティについてであるが、文学的テキストの「母の死」では、文末がほぼ一貫してタ形に終始しているのに対して、論理的テキストの「気配りとずるさ」では、さまざまなモダリティが見られる。以下、ここでは、文末表現「のだ」を中心に論じていきたい^(注4)。「のだ」は通常、説明のモダリティと考えられているが、論理的展開を行うテキストでは、文脈と密接に関係する機能を持ち、しかも多用される傾向がある。単に「説明」という機能だけを担っているというわけではないといえる。

(例1) しかし、気配りは打算やずるさと紙一重である場合もあるのではないか。(気配りとずるさ)

これは書き手の主張が示されており、テキストの中で中心的な役割を果たす文のひとつである。「のだ」が疑問形と共起することで、更に強い主張を示す形が実現している。

このほかに、「う」や「かもしれない」などの推量を示すモダリティと共起する「のだ」文もあり、これらは、随筆では、書き手がそれまでの内容をまとめながら控えめな主張をするといった、内容の分断点となる文脈の重要な位置に置かれるという特徴を持つ。

次に、テンスについてだが、日本語の文章では、大きくル形（非過去）とタ形（過去）とに二大別されることが普通である。文学的テキストの「母の死」では、特別な文を除き、すべてタ形に統一され、事件的な推移を軸に展開された小説的文体となっている。このように統一された文末は、Halliday&Hasan (1976) に指摘されるような、テキスト全体のまとまり（結束性）を生むことに役立っている。一方、論理的テキストの「気配りとずるさ」は、タ形は2文

のみで大部分が非タ形となっている。

このような文末の特徴がジャンル特性と結びつく現象は、比較的客観的に指摘が可能であるため、学習者にも分かりやすい。当該テキストのジャンル傾向をつかむ上で、有益な指標だといえる。

4. 3. 指示語

文章（テキスト）に見られる指示語は、書き手の視点や意図、文章内容との関係が深い。そのため、一般的に日本語教育で早い段階で学習する、談話（ディスコース）における現場指示との違いには、注意が必要である。

随筆における指示語としては、まず、日本語の文章では、一般的にソ系列の多用が指摘されているが、随筆では、比較的コ系列も多いことが挙げられる。こうした文脈指示のコ系列は、書き手が特に取り上げて読み手の注意をひきたいと考えるときに多く用いられるという特徴がある。これは、文脈指示のソ系列は「相手側」にある物事で、すでに会話や文章の中に現れた物事を示すことと対照的である。

(例2) 今度心臓の発作があったらもうあかと医者にいられていた、と弟はいった。そのことを私は知らなかった。(母の死)

これは弟の言葉を指すため、「ソ」で受けている例である。この部分は「コ」に置き換えが可能であるのだが、書き手の側にはないこと、つまり「知らなかった」内容であることから「ソ」が用いられているのである。同様に「コ」と「ソ」とに互換性がある場合、筆者の側の強い主張と絡む文においては、「コ」が用いられる。文学的文章を味わう上ではこういった文体的特性を意識することが大切である。

また、随筆や文学的文章では比較的頻出する絶対指示のコ（「この1週間」など）は、談話（ディスコース）でも同様の用法はあるが、内容理解の上で重要な用法である。他にも「それ

はこうこうでしょう」「こちらが分かっている話」などは注目すべき例である。

4. 4. 接続表現

文章の中では、接続詞や接続助詞のみが接続という役割を担っているわけではなく、語の意味関連によるものなど、様々なタイプが見られる。例えば、「あいにく」、「せめて」、「いわば」、「まず」などの副詞は、前の叙述内容を受けて文頭に位置し、文脈形成に重要な機能を持つ。また、語の意味関係が線条的に連続する文相互の意味関係を提示する場合や、「逆に言えば」（気配りとずるさ）などの連語が用いられる場合もある。さらに代名詞による置き換えも、ある種の接続と見ることができる^(注5)。

(例3) 他人への気配りは日本人の美德といわれてきた。公私ともども、かゆいところによく気がつく人は、どの職場でも受けがよく、概して日本で成功するタイプだといってもよい。しかし、気配りや打算はずるさと紙一重という場合もあるのではないか。(気配りとずるさ)

この場合の「しかし」は、「気配り」の礼賛から「気配り」の否定的な性格を提示している部分に用いられ、必須の接続詞といえ、逆接以外は入れられない。これに対して、「そして」など順接の接続詞では、それがなくても連続した行為の流れを理解することができ、省略も可能である。このように、接続や接続詞が省略される場合は、読み手が接続表現を推定しながら読み進めていくことが求められる。

4. 5. 引用と話法

テキストの中では、様々な話法が用いられている(鎌田(2000), 藤田(2000)など)。特に文学的文章においては、この話法が、内容や筆者の意図と密接に関係している。そのため、他者の言説を引用する際に、こういった形がとら

れるかということは、文学的文章の「味わい」と関わる部分となる。また、もっと基礎的な事項として、テキストの読解の中で話者の特定は、文学的文章における必須事項といえる。以下、間接話法と直接話法の例を、文学的テキストの「母の死」から挙げておきたい。

まず間接話法だが、これは学習者には比較的馴染みが薄く、指導の早い段階に入れ込む必要がある項目だといえよう。

(例4) どの病院か、とわたしは訊ねた。御茶ノ水の駿河台日大病院だ、とYがいった。(母の死)

(例5) 終わったのですか、とわたしは訊ねた。そうです、と医者は答えた。(母の死)

(例4)(例5)ともに、「」がなく、地の文に入れ込んである形であるが、前者は実際の発話ではなく、内容をまとめた形となっているのに対して、後者は発話どおりの叙述に限りなく近いものとなっている。一つのテキストの中の間接話法でも、両方の方策が併用されているわけだが、前者は簡潔に内容を展開しよう、後者は叙述の場面を生き生きと表現しよう、という意図が各々働いている。

次に直接話法の例を見てみたい。

(例6) わたしと弟はしばらくの間、軀をさすりながらずっと母に話しかけていた。「ごくろうさん」と弟はいった。「やっ」と休めるで」とわたしはいった。(母の死)

これは「」を用いることで、生き生きとした表現をねらった用法である。文章の結尾の部分で、大阪弁が効果的に用いられている。このテキストを書いた書き手の意図を読み取ることのできる部分だといえる。

4. 6. 語彙の結束性と構造

文章談話に現れる語句は、文脈において特有の「意味」を持って文脈を形成するという役割を担い、文章の全体構造や流れに関わる。同一語句や具体的な下位語、抽象的な上位語による反復表現は、文章内容の展開に重要で、読み手は、内容の関連を意識しながら読み進めていくことになる。

例えば「気配りとずるさ」では、「気配り」と「ずるさ」の2語はほぼ組み合わせられて使用されており、その出現位置は、作者の主張を示しながら抽象的な内容を持つ、冒頭と結尾の部分に集中している。一方、これらの語がほとんど見られない中間部は、エピソードが挿入されている部分である。

一方「母の死」では、「死」という言葉はテキストの最後の方のみ、「母」はテキスト全体に出現するという分布が見られる。これは死に向かう「母」を描写している内容であるためであり、「母」の様子が時系列に展開されていることと深く関わっている。

次に、各テキストの構造について考えてみたい。日本語の文章では、通常、冒頭一時下げによる形式段落が認められるが、これには書き手の恣意性が働くため、従来、内容上の統一と形式上の改行の一致との問題が指摘されてきた。そこで文章論においては、「文段」という、意味上のまとまりを成す単位を用いることが多い^(注6)。

以下、今回扱う2つのテキストの構造の大きな流れを示しておきたい。

「気配りとずるさ」は論説的文章の構造を持っており、論理的で客観的傾向が強い。全体は、冒頭で抽象的な内容（竹下登が気配りとずるさを持った政治家であったこと）がまとめられ、以下2つの例（竹下氏の島根県議時代のエピソード、人に恥を欠かせない竹下氏の作法）が並立する立体的構造となっている。

「母の死」は、文学的文章に近い時間的・線条的展開を持つ日記風の書き方がなされている。全体は4つに分けられる（母の入院の知ら

せをうける、母の病状について知る、母の闘病と死、死んだ母への息子たちの言葉）という展開になっているが、全てが連続した一本の線のように流れている。

5. 実践：随筆テキストの読解指導

本章では、前章でとりあげた随筆の文体的特徴を、実際の読みに生かす工夫を行った指導を紹介する。

<対象>

流通経済大学留学生2年生（2007年度）2クラスである。2つのクラスは、それまでの課題や小テストなどから、日本語のレベルはほぼ同程度であると考えられる。今回は、2クラスとも同一の内容を、3時間にわたって指導した^(注7)。

<実践内容>

1 時間目

①随筆テキストとは？

—文学的文章の導入として—

随筆テキストの特性について、日本語の文章の中で古い歴史を持つことや、様々な内容を含むジャンルであることを説明した。また、随筆を読むことが、文学的文章を読むための基礎的なトレーニングとなることを示した。

②随筆テキスト（論理的文章）の内容読解

「気配りとずるさ」：いわゆる新聞記事や普段の授業で用いる教材（論説文）とは異なるが、明確な主張を持つタイプ（付録資料参照）

2 時間目

随筆テキスト（文学的文章）の内容読解

文学的文章に近い随筆「母の死」の読解（付録資料参照）

3 時間目

随筆テキストに見られる文体的特性を、文学的文章（「母の死」）を中心に説明

本稿4章で述べた事柄について、実際のテキストを用いて説明し、テキストジャンルの特

性を知ることが、読みやすさにつながることを実際の文章を用いて理解させた。(付録資料参照)

また最後に、今回の一連の授業内容について、学生に感想を書いてもらった。以下は、その例である。

表記・言い回しはママ)

<感想>

- ・今回勉強した小説のような短編の文学的文章が大好きです。興味もあります。なぜかという、だいたい周りの出来事みたいだからです。いつか、人生にこのようなことがあったと、親しい感じがします。
- ・もともと日本の文学に興味を持っていました。しかし、難しくて、あまり読みませんでした。今日の随筆は短くて、とても面白いです。まだ自分にとって不足のところがよくわかりました。
- ・小説がすきですが、「気配り」の文章では、日本人の考え方に興味を持ちました。人間としてのあたたかみを感じ、もっとこういう文章を読みたいと思った。
- ・小説は難しいですが、随筆は短いので読みやすかった。勉強したことでスピードがつくようになった。

以上のように、論理的な性格を持つ随筆テキストの内容から文学的要素をくみとるといった、単なる論理的文章の読解とは違う感想が見られたほか、随筆テキストに関心を持って取り組むことができたとする感想が多かった。また、随筆テキストの読解から、文学的文章の読解への意欲がはっきりしたといった感想も見られた。

今回の実践では、『文藝春秋』の「巻頭随筆」を扱ったが、他の随筆、特に日記的なものや随想的なものといった、より文学的文章に近い特徴を持ったものを教材とすることによって、より実際の文学的文章に近づくことが可能になると考えられる。今後は、更に高度の発展的内容

を持つテキストの読解や多読などに向けた実践を行っていくことが課題である。

注

- (1) これは、国語教育の特に初期段階において、情操や思考の深化と併せた文学的文章の読み取りが盛んに行われているのとは対照的な事実である。
- (2) こういった理由から、文学の読解には日本事情などの授業と関連する部分も多く、これについても今後の研究が必要だといえる。
- (3) 西洋のエッセイは、モンテーニュの“essais”(1580)に始まり、幅広い内容を持ち、読者の知的欲求を満たすジャンルである。
- (4) 「のだ」については、田野村(1990)や野田(1997)の研究がある。
- (5) 市川(1976)のいう「連鎖型」の接続の中には前文及びそこに含まれる語句の意味内容を受けて後文が置かれ、その両者が直接結びつくと考えられているものがある。
- (6) これを用いた文章のマクロ構造に関する先行研究としては、「頭括式・尾括式・両括式・中括式・隠括式」(佐久間1993)という統括部位によるタイプ分けがある。
- (7) 指導対象の内訳は、1組24名(女子17, 男子7)(出身国、中国23, スリランカ1), 2組28名(女子16, 男子12)(出身国、中国27, スリランカ1)である。また、90分授業の中で、漢字や通常の課題なども併せて行ったため、各時間の正味の内容は60分程度である。

参考文献

- 五十嵐力(1909)『新文章講話』早稲田大学出版会
 市川孝(1976)『国語教育のための文章論概説』教育出版
 江田すみれ・飯島ひとみ・野田佳恵・吉田将之(2005)「中・上級の学習者に対する短編小説を使った多読授業の実践」『日本語教育』126
 鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房
 小森和子・三國純子・近藤安月子(2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120
 佐久間まゆみ(1993)「日本語の文章構造Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」宮地裕・清水康行編『日本語の表現と理解』放送大学教育振興会
 館岡洋子(2001)「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111
 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版

藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』 和泉書院
Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Longman

付録資料

配布教材内容抜粋 (本文のプリントは割愛)

(第一時間目)

<気配りとずるさ>

* 語句

気配り・美德・ともども・かゆいところによく気がつく (手が届く)・受けがよい・紙一重・竹下登 (人名)・希代・潜む・卑怯・功・あえて・あけすけ・世すぎ・ちょっと見・恥をかかす・あげつらう・所以・椎名悦三郎 (人名)・初耳・仕草・橋本龍太郎 (人名)・やりこめる・トンチンカン・奇麗事・タテマエ・タフネゴシエーター・至言・出し抜く

* 読解 (傍線部について答えましょう)

1. 「この希代の気配り人間」とは誰ですか。
2. 「当人」とはだれですか。
3. 「その点は……」とは誰の発言ですか。
4. 竹下氏にとって大切だと思われることは何ですか。
5. 竹下氏は橋本氏のことを、どのように言っていますか。
6. 「一流の政治家」になるのに必要なこととは、何ですか。
7. タフ・ネゴシエーターとはどういう人だと言っていますか。

(第二時間目)

<母の死>

* 語句

訊ねた・クルー・千歳空港・案の定・チューブ・繋がれる・ホーム・人口心肺・ダメージ・「もうあかん」(もうだめだ・大阪弁)・感染症・のりこえる・頷く・瞳孔・軀・「やすめるで」(やすめるよ・大阪弁)・まとも

* 読解

1. 登場人物の行動

筆者

() の杜台ファームで取材→母が倒れたとの知らせ→() 空港から() 空港へ→病院まで() で向かう

母

() 駅のホームで倒れる→御茶ノ水の() 病院へ運ばれる→すでに心臓は() していた

弟

() から新幹線で() 時ごろに病院に到着

2. 母の病状の変化

水曜日

(木曜日は省略)

金曜日

土曜日

日曜日

月曜日

3. 最後にかけた言葉

わたし「
弟「

(第三時間目)

<随筆の文体的特徴>

「気配りとずるさ」

書き手の職業は() であり、学者として何らかの主張が含まれていることが想定される。

文末で「()」や() 文が用いられている部分にそういった内容が含まれる。

「母の死」

書き手の職業は() であり、味わい深い、小説のような展開である。() 的文章に近い性格を持つ。

<随筆の特徴>

* 文末表現

文学的「母の死」: 文末は、ほとんど「
という形。内容にリズムが出る。

論理的「気配り」: 文末には、()。

- *指示語 2
 コ：() にひきつけて述べる内容 3
 ソ：() 側にあることをさす 4
 絶対指示：「こちら」「この一週間」「こうこう」
 <内容をもう一度考えてみましょう>
 「気配りとずるさ」
 書き手の主張はどこにありますか。どういう
 ことでしょうか。それについてどのようなこ
 とを考えますか。
- *接続表現
 逆接の接続詞に注目してみる。
- *引用
 「 」を用いている部分：生の声・読み手
 に強い印象
 「 」を用いない部分：筆者が内容をまと
 める
 「母の死」
 病室ではどのような言葉遣いでしたか。それ
 はどういったものでしたか。その理由は？
- *文章構造：意味内容のまとまりを考える。
 「気配りとずるさ」
 1
 2
 3
 「母の死」
 1
- *本稿は、2008年3月に行われた沖縄日本語教
 育研究会（於：琉球大学）における口頭発表
 の内容に加筆修正を加えたものです。ご指
 導・ご助言を賜った先生方に対して、この
 場を借りてお礼を申し上げます。本当にあり
 がとうございました。